ムラから出たご門徒とどう関わるか

～ムラのお寺の可能性をさぐる～

●〝消える〟と予想されたムラ

高齢化、少子化などに伴い、これからの日本社会では著しい人口減少の到来が待ち受けています。その現象に伴い、経済の停滞や行政機能の低下など、さまざまな予測がたてられています。ただ、わが国では、すでに〝過疎地域〟と呼ばれるところで、顕著な人口減少を経験しており、この現象を考える上で、先例的な事例として注目されています。

一九七〇年代のこと、ある地方新聞に大きな見出しが掲載されました。それは「A地区は今後一〇年以内に消滅する」というセンセーショナルなものでした。ただ、このA地区は、二〇一七年現在も集落として存続しているどころか、先年に赤ちゃんが誕生したので、さらに継続することが期待されています。予想に反して、集落が継続している実態は何に基づくのでしょうか？

●定住型と移動型

「限界集落」という言葉があります。この言葉は主に過疎地域などで、六五歳以上の住民が過半数以上に達した集落を意味します。これは、当時高知大学教授であった大野晃氏により提唱された学説で、「準限界」「限界」と経過した集落は、やがて「消滅」する可能性があることを示唆していました。

先のA地区は、すでに一九七〇年代時点で「限界集落」であったことから、消滅する可能性を指摘されたのです。しかし、五〇年近く経過した今も存続していて、さらに今後も継続していく見通しがたっていることに、社会学者などの専門家は注目しています。

この点について、「道の駅」の命名者として著名な徳野貞雄氏（熊本大学名誉教授）は、地域に関与する人びとの「動き」の把握がポイントになると指摘されました。集落の住民は買い物などで近隣の都市部に頻繁に行き来しますし、その集落出身の子や孫が所在地から集落に「出入り」していることなど、顕著な「動き」が確認できます。昼間は閑散と

した集落でも、夜間や週末になると人が増えることもあります。

「限界集落」などの状況を把握する際に、対象となるのは、住民票や現住所に記載があるなど、いわば「定住者」がほとんどです。しかし、現代人のほとんどは、高校や専門学校、大学の入学や就職などにより都市部に移住するなど、「移動型」の傾向が強いことが特徴です。

●T型集落点検の手法

徳野氏は、こうした人びとの「動き」に着目し、具体的課題を抽出することを目的に「T型集落点検」という手法を提唱しました。

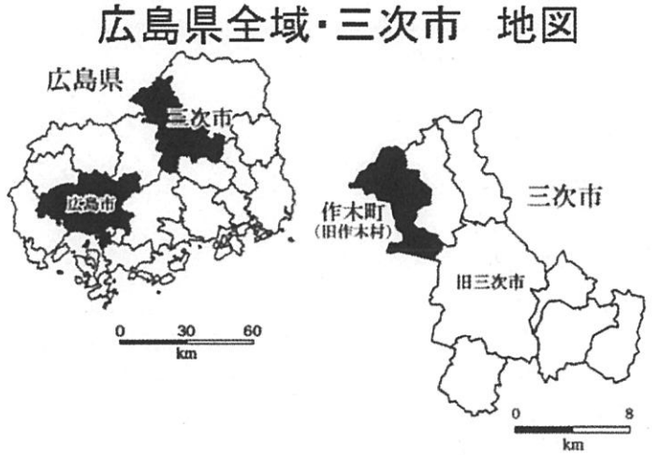
T型とは、両親と子どもの関係を示す際に表記される形を意味します。集落に居住する人だけでなく、他出した子どもや孫も対象にすることを意味します。

この手法をもとに、浄土真宗本願寺派総合研究所と寺院活動支援部〈過疎地域対策担当〉は、二〇一五年九月に、各教団の研究者や担当者が集い開催している「過疎問題連絡懇談会」や龍谷大学と協力し、徳野氏指導のもと、広島県三次市作木町を調査地域に選定し、「T型集落点検」調査を実施しました。

調査地となる作木町は一時人口が七〇〇〇人を超えていましたが、現在は一五〇〇人を切る状態であり、「限界集落」をいくつも抱える典型的な過疎地域です。また、この地域のお寺は、本願寺派寺院のみが三ヶ寺所在しており、いわゆる真宗地域といえます。

こうした地域にあって、お寺はどのように認識され、活用されているのか。また、作木町から出た人はどこに住み、集落やお寺と現在どう関わっているのか。この実態を把握すべく、お寺を会場としたワークショップと面談形式でのアンケート調査を実施しました。調査地区はお寺の所在する三地区と所在しない一地区に絞り、住民六九〇名を対象としました。うち、アンケートの有効回答が二二四通で、三二・五％の回答をいただく結果となりました。

以下、アンケートから得た結果をもとに、「地域とお寺」のあり方について、またムラから他出した人の現状把握をもとに、「お墓・お寺の継承」について報告します。



地域とお寺――お寺とつながる人とは――

●アンケート回答者の属性について

まず、アンケート調査にお答えくださった皆様がどのような方々であるのかについて簡単に見ておきます。

性別は、男性が四二％、女性が五八％で、女性が少し多くなっています。年齢は平均年齢が六八・五歳であり、回答者の半数以上が七〇歳以上となりました。

世帯形態は、一人暮らし一八・四％、夫婦二人暮らし二七・八％、夫婦と老親一一・三％、夫婦（または片親）と未婚の子ども一八・九％、三世代以上の同居家族一五・一％であり、多様な世帯形態でお住まいであることがわかります。ただ、世帯人数は、お二人でお住まいの方が三六・八％と最も多く、三人世帯までで全体の四分の三を占めますから、少人数でお住まいの方が多いようです。

常勤の職の方が一五％、農林漁業に従事されているとお答えの方は二五％おられますが、一方で、給与所得がないと答えられている方は七割を占めております。

また、お寺の役職経験のある方が四二％、役職経験のない方が五八％となっています。

以上から、回答者の多くは、七〇歳以上の年金暮らしの方で、お寺の役職経験のない方が約六割おられることから、お寺との関係があまり深くない方も多く含まれていると言えそうです。

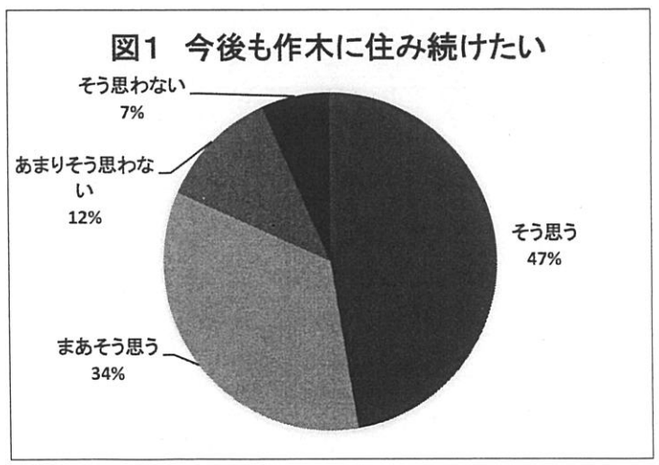
次からは、特に「地域に対する思い」「お寺に対する思い」「お寺に来られている人とはどのような人か」という観点から見ていきたいと思います。

●地域に対する思い

三次市作木町に住む人びとは、この地域に対してどのような意識を持っているでしょうか。

アンケートでは、地域に対する思いについて一三項目にわたって質問しています。その中でも特徴的な解答が見られた設問について紹介していきます。

まず、図1をご覧ください。「今後も作木に住み続けたい」と思っていらっしゃる方が八割以上を占めることがわかります。



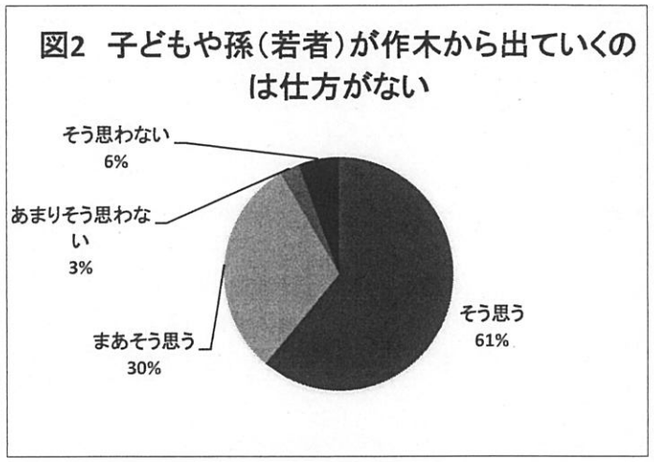


図2　子どもや孫（若者）が作木から出ていくのは仕方がない

ほかの設問の回答からは、作木の自然や文化を誇りに思っておられる方、この地に愛着のある方が八割以上いらっしゃることがわかりました。それゆえに、子どもさんやお孫さんにもこの地に住んでほしいと考えている方が半数以上を占めています。

一方で、図2を見ると、この地から子どもや孫を含めた若者たちが出ていくのは仕方がないと考えておられる方が九割以上であることがわかります。ほかの設問では「この地域の人口は減る」とお答えの方も九割以上を占めました。

「良い教育環境がある」とお考えの方は半数近くおられますが、「良い就職先がある」とお考えの方は一割にも満たない回答率です。「交通の便が良い」との回答も二割という状況ですから、この点が若者の人口流動を「仕方ない」と考える理由になっているのかもしれません。

この地を愛し、子孫にも住んでほしいと思いながらも、若者がこの地を出ていくことには諦観しておられるようです。

●お寺に対する思い

次に、地域の人びとにとって、お寺はどのような存在だと受け止められているのかについて見ていきます。今回の調査では、お寺とのつながりやお寺に対する思いについても複数の質問をさせていただきました。

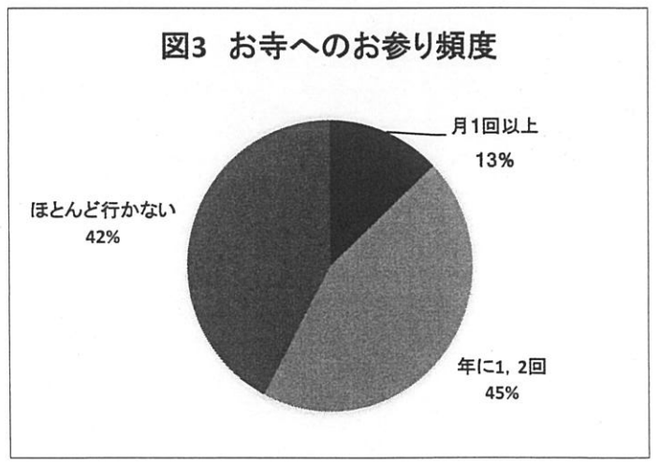


図3　お寺へのお参り頻度

お寺へのお参り頻度については、月に一回以上参られる方が一割、年に一、二回という方が四割、ほとんど行かないという方が四割となっています（図3）。

お寺に行かれる具体的な内容としては、法要に行く方が半数、教化団体の活動に行く方が四割、法事などご自身の家の行事で行かれる方は三割五分と一定の割合がありますが、個人的な相談で訪問される方は二％ほどです。反対に僧侶が回答者の自宅に訪問する頻度は、年一、二回が四分の三以上を占めており、ほとんど来ないとの回答も一四・五％ありました。

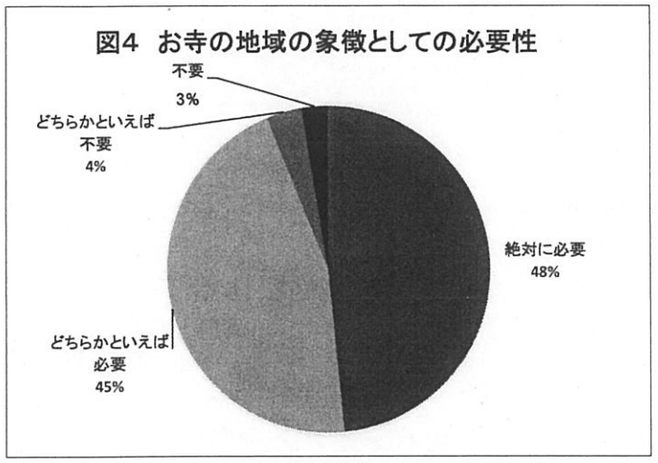


図4　お寺の地域の象徴としての必要性

アンケートでは、九項目にわたりお寺の必要性について尋ねています。図4のように、お寺は「地域の象徴」として必要とされています。

このほかの設問では順に、「信仰の重要な心のよりどころ」として八割、「地域の伝統を守る存在として」「教上、「地域の伝統を守る存在として」としては八割、「地域活えを聞く場所」としては八割、「地域活動の拠点として」は七割五分、「家族のつながりの象徴」としては六割五分、「親族が集まる機会を提供する存在として」は六割、「お墓の面倒を見てくれる存在」は五割の方が必要と答えています が、「個人的な相談に乗ってもらう場所」としては四割程度と、九つの設問の中で は最も低い必要度となっています。

住職と坊守（ぼうもり）それぞれについて「相談に乗る」という役割も聞いていますが、「ある」と答えた人はともに一五％となっていました。

回答者の多くの方が、お寺に個人に対する相談などのケア役割を期待することは少なく、「地域の象徴」「地域の伝統」という側面が強いことがわかります。一方で、「相談に乗る」ことを期待されている回答者も一定の割合でおられ、お寺とのつながり方に違いがあることもわかりました。

●お寺とつながる人とは

では、お寺とつながりがある人とはどのような人たちなのでしょうか。

この点を明らかにするために、以下に「お寺にお参りする人」の中で、年一回以上お参りすると回答した人を「お参りする人」（五七・七％）、「ほとんどお参りしない」と回答した人を「お参りしない人」（四二・三％）と大きく二つに分けて、それぞれのグループの違いを確認していきます。さらに、この違いを見るために組み合わせる設問もわかりやすいように、大きくまとめて、「お寺にお参りする人」の比率に差のある項目について見ていきます。

まず、年齢を七〇歳未満と七〇歳以上の二つに分けると、七〇歳未満の方でお参りする人は五割程度であるのに対し、七〇歳以上が六割以上と差がありまし

た。年齢が高い人の方がお寺とつながりがあるようです。

次に、性別を見ると、男性でお参りは五割程度であるのに対し、女性は六割以上と女性の方が多い結果となっています。また、自治会参加の有無を見ると、自治会に参加している人の六割以上がお参りする人であるのに対して、参加しない人はお寺のお参りも五割に達していません。

先ほど取り上げた設問ですが、お寺が「個人的な相談先」として「必要」と答えた人は、六割以上がお参りする人であるのに対して、「不要」とした人はお参りが五割に達していませんでした。さらに、お寺を「信仰のよりどころとして必要」とした人でお参りは六割なのに対し、「不要」とした人はお参りが五割に満たないという差も見られました。

地域に対する思いを尋ねた問いについては、作木町を「交通の便が良い」「暮らしやすい」「生きがいのある暮らしをしている」と肯定的に感じている人の方が、そう感じていない人よりも「お参りする人」の割合が高くなっています。

さらに、「お墓を今後どうするか」という設問に対して、「継承者がいる」と答えた人の六割以上が「お参りする人」であったのに対し、「継承者が決まっていない」と答えた人は五割となっています。

「お寺にお参りする人」の比率に差が出た項目のうち、図5に示した「子どもの有無」で最も大きな差が見られました。

以上の結果からは、お寺との関わりが深い人は地域との関わりが深い人であるという姿が見えてきます。また、その中でも、お墓やお寺との付き合いを継承する相手となる子どもの存在は、お寺とのつながりをつくる大きな要素となることも推測できます。

お墓、お寺の継承

●しなやかに生きる

人はしなやかに状況の変化に対応し生きています。今回の調査からは、そのことが改めて明らかになったのではないでしょうか。

当研究所ではこれまでも、過疎地の寺院調査を続けてきましたが、「過疎＝人がいなくなる」という固定観念を拭うことはなかなかできませんでした。この中でお寺がいかに対応していくのかということを考えていました。

しかし、今回の調査では、一概に「過疎＝人がいなくなる」という図式では捉えきれない面が明らかになってきました。例えば、調査地の一つB地区の人口ピラミッドを示した結果が図6となっています。

B地区は作木町の中心的な集落ですが、それでも六五歳以上の高齢者が非常に多い人口構造であることが分かります。過疎化と高齢化が進んでおり、従来通りの存続が危ぶまれる地区であると言えるでしょう。

しかし、今回の調査で明らかになった集落を離れて生活する子ども（他出子）世帯の人口を重ねると、異なった状況が見えてきます。調査では、他出子の居住地を尋ねており、広島市・広島県内など日常的な行き来が可能であると考えられる範囲に居住している他出子を重ねた人口ピラミッドが図7です。

この図から、B地区自体は、高齢化が進んでいるものの、行き来可能な範囲に子どもたちが住んでいて、いわば広域化した「家族」によって、B地区の人びとの生活が支えられていることが窺えます。

農村集落から若者が出ていき都市部に住み、集落には老親が残る。住むところは別々になりますが、そこでつながりがまったく切れてしまうわけではありませ

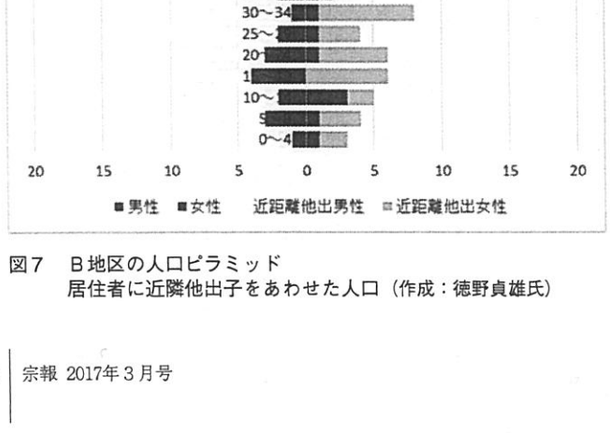
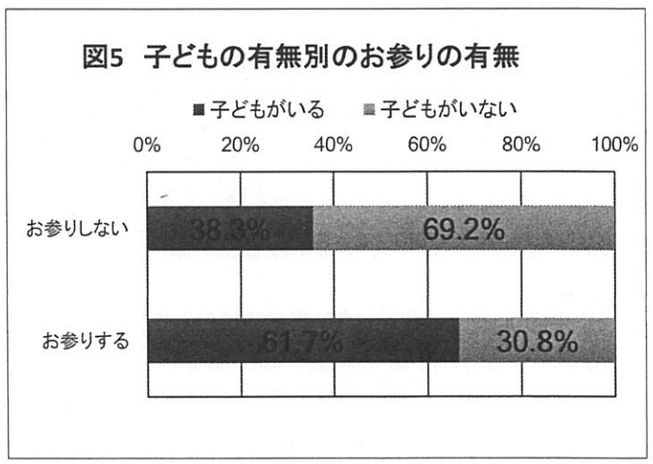


図6　B地区の人口ピラミッド
居住者人口（作成：徳野貞雄氏）

図7　B地区の人口ピラミッド
居住者に近隣他出子をあわせた人口（作成：徳野貞雄氏）



ん。当たり前のことかもしれませんが、そこには「家族」というつながりがあり続けているのです。月に一度、もしくは週に一度、子どもは親のもとを尋ね、親は孫の顔を見ているわけです。

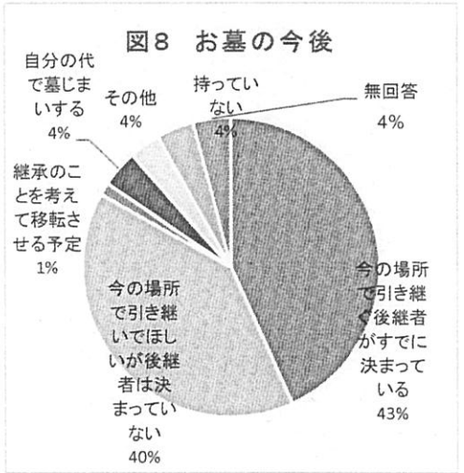
従来の過疎に対する考え方においては、この広域化した「家族」のつながりという視点を描き出すことができませんでしたが、今回の調査によって、そのつながりの一端が明らかになったのではないかと考えられます。状況は変われども、「家族」のつながりを持って人はしなやかに生きています。

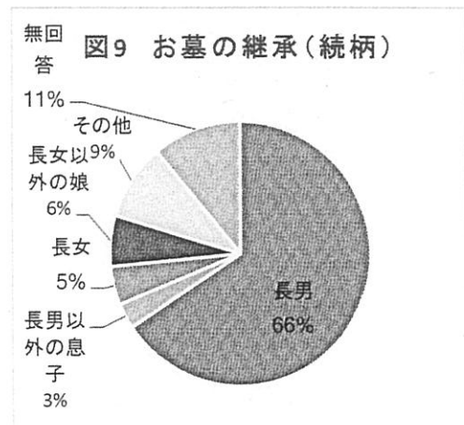
●お墓の継承

広域化した「家族」のつながりが見えてきましたが、それでは、お墓やお寺とのつながりはどうなっているのでしょうか。今回の調査では、お寺やお墓についていくつかの設問で尋ねています。

今回の調査では二二四名の方に回答いただきましたが、お寺やお墓については、どうしても「家」「世帯」単位で考えざるをえない状況があります。今回の調査では一四八世帯からの回答をいただきましたので、この世帯の回答をもとに見ます。なお、世帯の代表者については、今回の調査では明確ではないため、こちらで選択しています。

まず、お墓の現況について見ていきましょう。お墓があるという世帯は九五・三%で、そのうちの八四・五%が親世代から継承したお墓、一二%が自分の代で作ったお墓となっています。また、お墓の場所は、五九・九%が自宅の敷地内、二六・八%が集落内の共同墓地となっています。





このお墓の今後について尋ねた結果が図8です。この結果、「今の場所で引き継ぐ後継者が決まっている」が四三・二%と最も高くなっている一方で、「今の場所で引き継いでほしいが後継者は決まっていない」も三九・九%と高くなっています。また、「墓じまい」は四%となっています。

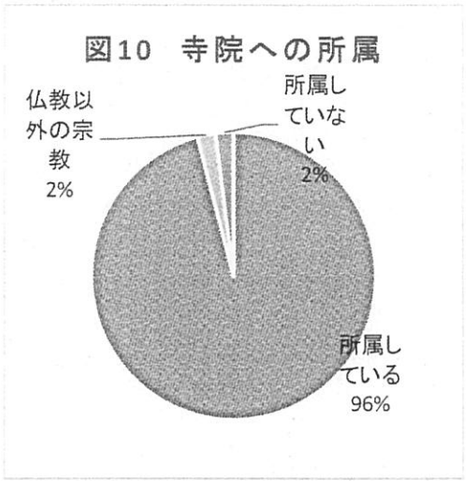
この「今の場所で引き継ぐ継承者が決まっている」場合は、長男が六五・六%

と、基本的には長男が継承するというかたちになっています。ただし、長男以外の継承も三四・四%となっています（図9参照）。

この結果から、当地ではこれまでどおりにお墓を継承することが見られました。ただ、少数ではありますが、後継者不在や墓じまいなどの問題があることも窺えます。

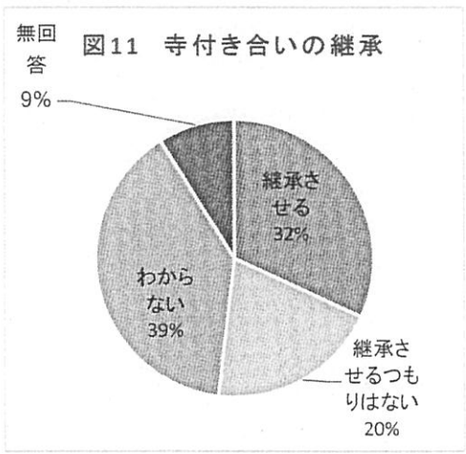
●お寺とのつながり

お寺に門徒として所属しているかを尋ねた結果が図10です。

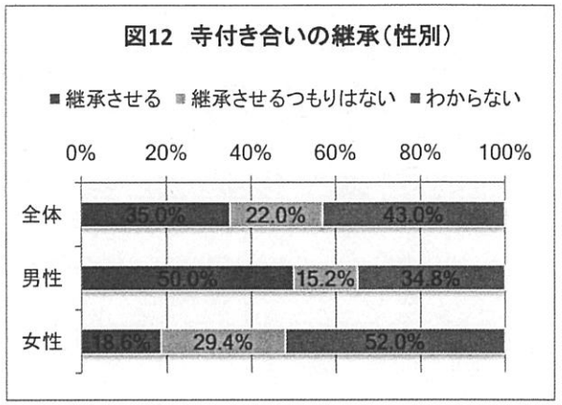


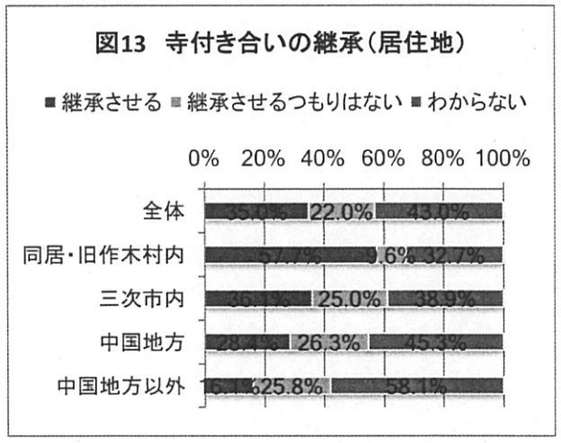
この結果、ほとんどの世帯（九五・九%）がお寺に所属していることが分かります。厳密には明らかではありませんが、地域的にも所属しているお寺は、ほぼ本願寺派寺院であると考えられます。また、同じく地域的に、少し離れたところにあるお寺に門徒として所属するとともに、居住地集落にあるお寺ともつながりを持ついわゆるケキョウ制も見られます。

このお寺との関係は次世代に継承されるのでしょうか。一四八世帯のうち子どもがいる世帯は八九・九%（子どもの人数二八九名）でした。さらに、二〇代から五〇代の子ども（二三五名）について、お寺との付き合いを継承させる予定であるかを尋ねた結果が図11となっています。この結果、「わからない」が三九・一%と最も多く、「継承させる」（三一・九%）、「継承させるつもりはない」（二〇%）となっています。



お寺との付き合いの継承と、性別・居住地との関係を見た結果が図12・図13（次頁）です。この結果を見ると、男性の子どもについては五〇%が継承させる予定であるものの、女性の子どもについては五二%がわからないとなっています。お寺との付き合いは、「家」として捉えられており、その継承は、男性を軸としていることが窺えます。居住地については、子どもの居住地が遠くなればなるほどお寺との付き合いを継承させていく割合が低くなることが顕著に表れています。





今回の作木町における調査は、徳野氏の指導により、従来の調査では捉えることができなかった現状を描き出すことができたのではないでしょうか。それは、現代の人びとは移動しているということであり、住んでいる場所は違うけれども、その間には行き来やつながりがあり、「家族」が広域化してしなやかに生きているということです。

しかし、お寺との付き合い、お墓については事情が異なることも見えてきました。移動し広域化する「家族」の中では、お墓やお寺との付き合いの継承が難しくなっていることが窺えます。まだまだ明らかではありませんが、広域化している「家族」という現実に対して、お墓・お寺は「世帯」、さらに男性が「家」を継承していく意識が強いのではないかと考えられます。

家族が広がってつながりあっているという現実と男性が継承するという意識のズレに対して、お寺がどのように対応していくのか、いかにしてご法義を伝えていくのかを考え、働きかけていく必要があるでしょう。

小結――ムラから出た人のもとへ――

この調査結果を踏まえ、二〇一七年一月二八日、作木町から広島市周辺に他出した人を対象として、作木町三ヶ寺が協力し、「作木町・江の川ふるさと法要」（離郷門信徒のつどい）が本願寺広島別院で開催されました。

この調査から地域の象徴としてのお寺への必要性が九割以上になっていたこと、さらにお寺との関わりの継承が課題であることがわかりました。そこで、他出された方がアクセスしやすい広島別院を会場に、ふるさとのお寺が主催となり向き合う取り組みが、生き生きとしたお寺の再生への糸口となることが期待されます。

浄土真宗本願寺派総合研究所
委託研究員　猪瀬優理
研究協力者　長岡岳澄
教団総合研究室

法要を営むことによって、ふるさととのご縁、別院と作木町出身者とのご縁がむすばれることを目的に、開催することとなりました。

当日は三ヶ寺で約四〇名の方が参加されました。幼馴染で数十年ぶりにあわれた方も多く、同窓会のような雰囲気になりました。

「このようなことを待っていた」「法要を楽しみに、何日もリハビリして歩けるようになって別院に参りました」「今日は余韻に包まれた」「次は家族にも声をかけます」「是非また開催してください」など、ふるさと法要が終わった直後から、主催者のお寺の電話に、参加された方の声が多数寄せられました。さらに、作木町の人からも「広島の妹から連絡があった」との電話もいただいたそうです。こうした声が地域にも刺激になり始めています。

作木町三ヶ寺では、今度はさらに若い方へも積極的に声をかけていこうとしています。このような、広域化した家族に